

「わからない…」若い家族 自分の置かれた状況が腑に落ちるように

患者さんやご家族をサポートする仕事に就いて、同僚からの信頼も厚い幸子さんが「私は、両親の看取りは後悔ばかりなんです」とふと漏らしました。何年も前なのに今も後悔しているというのはどんなことでしょうか、お聞きしました。そのころは医療に関しては全くの素人だった幸子さんの物語は、患者・家族へのかかわりやグリーフケアの参考になりそうです。

*

母は47歳で亡くなりました。乳がんで闘病が10年以上続き、私は20代で社会学の大学生で、医療のことは何も分からない。何が起きているかも分からなかったですね。私が留学中だったので文通したり、留学先に遊びに来てくれて「これが母との最後の旅かな」とぼんやり思ったり……。

病状がよくないとは聞いていたけれど、本当に亡くなるなんて思えなかった。私が帰国して半年後でしたが、「その日」がいつなのか、全く予想がつかず、母の亡くなった日も私はアルバイトに行ってしまう、死に目に会えませんでした。母は最期まで、息を引き取るまで意識があって、ありがとうとか、ちゃんと話をしていたと後で聞いて、後悔が残りました。今思うと、母は30代で乳がんになり、今でいうAYA世代でしたから、いろいろな思いもあったかと……。

*

母の3年後、父も逝きました。

12月も押し詰まったところに、留学先に親族から電話が来て突然「お父さんが入院した。がんで末期だ、帰れ」と。バタバタ戻ってみると、病名告知もされていません。私は素人ながら「本人に病名も伝えられないという選択肢はないだろう」と思ったので

す。でも父の兄弟から「お前がそれを伝えて、責任とれるのか」と迫られ、責任はとれないけど……と引き下がってしまい、罪悪感のようなもやもやが残りました。

知り合いから「困ったときは連絡すると良いよ」と紹介された看護師さんがホスピスケア研究会の季羽倭文子先生でした。困り果てて電話をしたところ、すぐ来てくださいました。

季羽先生は父の病院の食堂で、父の兄弟や私たち

姉弟に「告知をするかどうかはそれほど重要なことではない。今できることをしましょう。それぞれできることがあるから」と、今できることに目を向けさせてくれました。特別なことではなく、話ができなくなっても家族がそばにいるとお父さんの顔になる、とか、お茶で口を漱



幸子さんと季羽さんの交流は続く。季羽さんの著書「がん家族はどうしたらよいか」「死に向きあって生きる」(撮影 秋山正子)

ぐと気持ちがいいとか、足をさするとか、触れるとか……、家族ができることとその意味を教えてくださいました。そんなふうに2か月ほどすごして父は60歳で亡くなりました。

病院の医療者ともいろいろ話し合っていました。そのとき自分たちの置かれている状況、いま何をすべき時なのかピンときてなかった。そこが季羽先生のソフトな関わりで腑に落ちたのでした。私自身は、父に大事な話(病名告知)をしていない罪悪感がありましたが、それも季羽先生に教えていただいたことでクリアできたのです。

今の仕事で、私がお話するときにも、その家族が普段から当たり前に行っていることの意味や大切さに気付いてもらえるように心がけています。

むらかみきみこ◎ターミナルケア・医療安全・在宅ケアのテーマで、国内各地、海外10か国を継続取材。主な著書に『患者の目線—医療関係者が患者・家族になってわかったこと』(医学書院)、『納得の老後—日欧在宅ケア探訪』(岩波新書)。